平成２８年度「キャリア教育・就労支援等の充実事業」成果報告書

受託団体名	学校法人立花学園立花高等学校

Ⅰ　概要

１　モデル地域の概要

①モデル地域の種類　※Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型のいずれかに○を付してください。

	Ⅰ型（連携型：特別支援学校高等部及び高等学校の連携）
	Ⅱ型（単独型：特別支援学校高等部のみ）
○	Ⅲ型（単独型：高等学校のみ）

②モデル校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
学校法人立花学園	高等学校	全日制	立花高等学校（たちばなこうとうがっこう）

２　研究課題

発達障害の特性を生かした就労支援の在り方～普通科高校における社会福祉法人及び企業等との連携によるデュアルシステムの構築を目指して～

３　研究の概要

①　モデル地域における取組み

（ア）　モデル校の関係機関等による就労支援ネットワークの構築

（イ）　発達障害に対する理解啓発推進研修会の実施

（ウ）　地域の特別支援学校との連携

（エ）　一般企業との連携

②　モデル校における取組み

（ア）　就労支援コーディネーターの配置

（イ）　障害者就労及び発達障害についての研修

（ウ）　キャリア教育・職業教育の改善充実

（エ）　デュアルシステムの構築

（オ）　発達障害への理解を深めるための啓発活動

（カ）　卒業生の追跡調査

4　研究の成果

① モデル地域における取組み

（ア） モデル校の関係機関等による就労支援ネットワークの構築について

社会福祉法人「野の花学園」、NPO 法人「パイルアップ」、地域自治会、社会福祉協議会、等と毎月の定例会議を実施してネットワークを構築した。

（イ） 発達障害に対する理解啓発推進研修会の実施について

平成 28 年 12 月 3 日に、本校が実行委員を務める「福岡こどもたちのセーフティネット研究会」が主催となり「第 7 回特別支援教育（不登校・学習支援・就労支援・接続支援・関係諸機関との連携）に関するセミナー」を実施した。256 名の参加があった。

（ウ） 地域の特別支援学校との連携について

「第 7 回特別支援教育（不登校・学習支援・就労支援・接続支援・関係諸機関との連携）に関するセミナー」分科会に、福岡県立特別支援学校北九州高等学園を分科会の講師に招聘した。研修を通して公立と私立の連携を深めることができた。

（エ） 一般企業との連携について

職場実習の受け入れ先として 250 社以上の企業と提携し、実習期間中に限らない日常的な情報交換を活発に行うことができた。

② モデル校における取組み

（ア） 「就労支援コーディネーターの配置」について

就労支援コーディネーターの配置により、発達障害のある生徒への決め細やかな支援ができた。それにより、職場体験学習の受け入れ事業所の開拓もスムーズに行なえた。

（イ）「障害者就労及び発達障害についての研修」について

先進校視察として学校法人神須学園大阪技能専門学校、学校法人岡崎学園東朋高等専修学校、東京都立大江戸高等学校、他の視察を行なった。

（ウ）「キャリア教育・職業教育の改善充実」について

職場体験学習が短期的な取組みにならないように、事後学習の中に進路学習を取り込み次年度につながる計画を立て実行した。

（エ）「デュアルシステムの構築」について

デュアルシステムの構築を目指して本年度で三年目になる。職場体験が終わるごとに毎回振り返りを行い、改善を繰り返してきた。今後も改善の必要な部分はあるが、過去二年間の中では大変安定したシステムになった。

（オ）「発達障害への理解を深めるための啓発活動」について

職場体験学習を通して各事業所に発達障害の理解について説明を行なったり、「第7回特別支援教育に関するセミナー」の開催や、地域連携会議（お互いさまコミュニティ会議）を定例開催するなど啓発活動を行なった。

（カ）「卒業生の追跡調査」について

卒業後の職場退職や上級学校退学があった場合に、一人で悩まずいつでも学校に相談できるような仕組みを作った。

５　課題と今後の方策

・障害者就労及び発達障害についての研修を重ねていても、個々の教職員の理解の差により支援にはバラつきが生じてくる。共通理解した内容をいかにして、実践していくかは、さらに丁寧な共通理解が必要である。

・組織的・系統的な進路学習の実施がまだまだ不十分である。今年度も昨年度より各学年の取組み内容は充実してきているが、さらなる改善は必要である。

・職場体験学習の取組みが3年目をむかえて、ハード面の整備は着々と進んだが、ソフト面は毎回、毎回検証が必要である、デュアルシステムの安定がややもすると、教職員側に「慣れ」を生んでいく可能性もあり、職場体験が単に参加するだけの行事になることはさけなけらばならない。次年度4年目は、実習でミスマッチや途中リタイアした生徒などを組織的に支援していく方策を整備する必要がある。失敗体験を失敗と捉えず、自らの課題発見と捉えるようにし、様々な特性がある生徒が、その特性を強みに変えて自分らしく活躍できる為にどのように支援していくべきか研究が必要である。